

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名北方圏農学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	新カリキュラム実施に向け、実験や実習の実施主体の明確化を図ると共に、新設科目実施へ向けた準備を進めている。	教員や研究室の垣根を低くする取り組みとして、1 年生の研究室訪問を実施している。	実験および実習について、電子ファイルによる情報共有を試みている。	問題を抱える学生について、出席状況等を含め学科会議で情報共有と対応策について意見交換する場を設けている。	都度、学科内でワーキンググループを立ち上げるなど、評価方法について検証を行うようにしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生産現場や研究の最新情報を盛り込むように配慮しながら、学生の成績評価の責任を高めることができる。	【長所】 1 年生の段階から研究室の訪問を促すことにより、3 年生からの研究室配属イメージを醸成できる。	【長所】 評価責任者、学科長、主事でファイル共有し、チェックできる体制にしている	【長所】 学科内で情報共有することにより、実験や実習等で問題のある学生への配慮ができる	【長所】 教学・FD 委員を中心として、評価内容についての検討を行っている。
	【特色】 季節に影響される内容についても盛り込むことにより、学生に生物生産や生態系保全の考え方を促すことができる。	【特色】 各教員で企画した研究紹介企画に参加させている。	【特色】 出席簿の電子化へ向けた取り組みの実施と、再履修者への配慮ができる。	【特色】 できる限り、個々の教員が学生一人一人のイメージがしやすいように配慮できる。	【特色】 適正な評価となるよう、学科会議内において、その都度注意喚起を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 すでに実施ししている科目と、学部の実習が重なるなど、学生の学習への取り組みに影響が出てきている。	【問題点】 1 年生の科目受講時間帯との調整が難しい。	【問題点】 紙ベースに比べ、担当者間で連続欠席者の把握がしにくい	【問題点】 成長の記録、成績不振学生の対応と、学生の対応に追われている	【問題点】 授業評価アンケートとの乖離がないか、検証することが難しい。
	【課題】 新カリキュラム移行に伴う時間割編成の見直しにより、実験や実習のスケジュール管理が難しくなる。	【課題】 学生の多様性を考慮した場合、企画参加に制限を持たせることが難しい。	【課題】 教員間でファイルを共有できるシステムの構築が必要	【課題】 成長の記録を中心とした指導記録の整理が必要。	【課題】 現在、ワーキンググループ立ち上げなど、検証を進めている段階であるため、評価が難しい。
根拠資料名			資料 1：Excel 版出欠簿のフォーマット	資料 2：成長の記録フォーマット	

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	試験担当者については、学科内で協議の上決定している。また、学生募集については、過去の学生の指導実績などを勘案し、その都度修正を試みている。 推薦系の入試では、学科の評価基準を設け、担当者間の温度差が出ないように評価シートによる評価基準の統一化と点数化に努めている。	学生ごとに入試制度と GPA、指導記録などを一覧化し、検証できるようにしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 事前に評価基準を検討することにより、担当者間の評価の温度差を少なくすることができる。 学科の特性に合った受験生の評価をすることができる。	【長所】 入学後の評価として、成長の記録と共に検証を行う基礎資料とすることができる。
	【特色】 勉強だけでなく、キャンパスの地域特性に合った学生への配慮もできるように工夫している。	【特色】 学籍異動も含めた検索がしやすいように努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 多彩な入試制度を儲けているが、実施時期等を検討しなければ、入試制度に沿った受験生確保が難しくなる。	【問題点】 個人情報のため、特定の PC に保存するなど、データの取り扱い方法の検証が不十分 全学共通システムで未稼働の項目もあり、学生の指導内容の確認がしにくい。
	【課題】 入学後の学生評価とのギャップについて検証が難しい。	【課題】 電子ファイルについて、学科内の教員間で情報共有する方法が構築できていない。 全学共通の指導記録システムの早期稼働が望まれる。
根拠資料名	資料 3：面接評価シート	個人情報を含むため、学科内での共有に留め、公開していない。

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	半期毎に学科の教授会により、方針について検討を行っている。 また、学科会議にてその方針を伝えるように努めている。	教員の年齢や職階について定期的に確認を行い、特に若手研究者の研究実績向上を意識した補職選定等の編成に努めている。	半期毎に職階を含めた教員構成を見直し、協議を行っている	若手研究者の研究実績および研究の資質向上に向けた取り組み（留学等）に努めている。	准教授職以下については、年 1 回程度の研究実績について報告させ、人事の配置の参考資料としている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 半期毎に点検し、将来構想をまとめることができる。	【長所】 若手研究者が業績を向上しやすい環境を整備。	【長所】 年齢や職階をできるだけ適正にできるように配慮できる。	【長所】 若手研究者の見聞を広めるとともに、人的ネットワークの形成ができる。	【長所】 自己評価を定期的に行うことができる。
	【特色】 特にない。	【特色】 特にない。	【特色】 年齢や職階について一覧表を作成し、検討しやすいようにしている。	【特色】 特にない。	【特色】 特にない。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 今のところ生じていない	【問題点】 個人の執務能力に依存することが多い。	【問題点】 学部の補職との整合性と、学科運営時に必要な人事構成のバランス取りが難しい。	【問題点】 研究内容も含め、個人の能力に依存することが多い。	【問題点】 研究実績と社会貢献とのバランスについて評価が難しい。
	【課題】 学部の構想との整合性をとる場合の対応が課題	【課題】 学部と学科の補職に適合する人材の調整が難しい。	【課題】 学部や学科の将来構想へ向けた転換期への対応	【課題】 依命留学などの場合、所属する分野の欠員に対するフォローが難しい。	【課題】 個人の能力に依存することが多く、業績が不足する教員のフォローアップが課題である。
根拠資料名					農大の研究業績書のフォーマットを使用しているため、特に資料はない。

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名海洋水産学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	カリキュラム編成について、数年に一度行われるカリキュラム変更に合わせて、科目構成、科目名変更などの見直しを行っている。 次年度以降に予定されている新カリキュラム編成に向けて、学科会議で議論を行っている。	学習量が多い科目に関しては、適宜中間試験を設け、中途における習熟度を確認している。また、小テストや課題などにより前回学んだ項目について、各自理解度を確認させている科目を設けている。	シラバス等で科目ごとに評価基準を明記すると同時に、初回講義では口頭で学生に説明している。大学の基準に従った成績評価、単位認定および学位授与を行っている。	定期的に学生のGPAを把握することで、GPA が低い学生について個別の指導を実施している。学生の授業評価アンケートを元に授業の改善を行っている。	学科会議において科目編成および時間割編成の適切性について検討を行っている。各科目において、学期末に学生による授業評価アンケートを実施し、その結果を各教員が、次年度以降の授業に役立てるようにしている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 実験・実習を重視したカリキュラム体系になっている。	【長所】 理解度、習熟度の確認を学生本人ができる。	【長所】 なし	【長所】 GPA が低い学生に個別指導することにより、DP の実現を図ることができる。	【長所】 科目編成および時間割編成の適切性について検討することにより、よりよい教育課程を構築できる。
	【特色】 座学のみならず、1年次から、実験・実習科目を配置している。	【特色】 学習量が多い授業に関して、中間テストや、毎回の小テストにより学生の理解を深めている科目がある。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 理解度、習熟度の確認を学生本人に行わせる科目が多くは無い。	【問題点】 なし	【問題点】 個別の指導の成果が十分上がっているとは言えない。	【問題点】 学科改組に伴い複数のカリキュラムが走っており、入学年度による不利が生じないよう、適切に改善を図る必要がある。
	【課題】 なし	【課題】 さらに、多くの科目で取り組む必要がある。	【課題】 なし	【課題】 学習意欲の低い学生の指導法の確立が必要。	【課題】 複数カリキュラムによる学生の混乱を避ける指導が必要。
根拠資料名	講義要項	なし	講義要項	講義要項など	講義要項など

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本学科のアドミッションポリシーに基づいた内容で高校生に対する情報発信をオープンキャンパスなどを通して積極的に行い、学生募集を行なった。大学の定めた入学者選抜制度の枠組みの中で、アドミッションポリシーに則った入学者の選別を行なうため、学科内に基準を設定し、それに基づいて公平・適切な選抜を行なった。いずれの入試においても、学科教員全員による厳正な審査により、可否の判定を行なった。	学生の学籍データ（入試制度・GPA 記載のもの）を教員全員で共有し、入試制度および学生受け入れの適切性について点検・検証を行なっている。また、昨年度行った指定校の大幅な見直しを踏まえ、受け入れる学生の適切性を把握することとした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 オープンキャンパス等を積極的に利用して高校生に本学科の魅力をアピールすることにより、ミスマッチによる学力低下を減らすことができる。学科教員全員による可否判定を行うことにより、多様な学生確保が可能となる。	【長所】 学生の学籍データ（入試制度・GPA 記載のもの）を教員全員で共有することにより、学科全体で個々の学生の状況を把握でき、学生の受け入れの適切性について判断できる。
	【特色】 オープンキャンパス等を積極的に利用した高校生に対する本学科の魅力のアピール 学科教員全員による可否判定	【特色】 指定校の見直しによる入学者の動向に関して情報が増えることにより、より良い学生の受け入れが可能か判断できる。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 より積極的な高校生へのアピール法が無い、検討が必要。	【問題点】 上記の検討を踏まえて、入試制度および学生受け入れ方針を改善することが必要。
	【課題】 教員や学生の教育・研究活動の積極的な発信。	【課題】 上記の検討を踏まえた、入試制度および学生受け入れ方針の改善
根拠資料名	学科会議議事録	指定校リスト

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学・学部の方針ならびに学科設置時に文科省に提出した「設置の趣旨等を記載した書類」に記載されている教員組織の編成の考え方及び特色に従った方針を学科として明示している。	学科の教育研究上の目的、教育目標、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーを十分理解し、その具現化に向け強い意欲を持つ教員を研究室に配置している。しかし、1研究室で欠員があり、その補充が次年度以降となっている。	教員の募集、採用は完全公募制とし大学ホームページならびに JRECK-IN で公開している。 昇格基準を満たすよう、学科としてフォローしている。 昇格基準を満たした教員に対しては、昇格申請を提出する様に指導している。	任期制教員に対しては、毎年教育・研究目標の達成状況を面談にて確認している。 任期制教員以外は、大学が実施している自己点検のみに委ねている	教員組織の適切性について点検・評価を学科会議などで行い、本学科の未来を見据えた教員組織の適切性に関する議論を行い、次年度に採用する助教 1 名を確保した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 教員組織の編成の考え方を明示している。	【長所】 なし	【長所】 昇格基準を満たすようフォローすることにより、教員の承認が適切に行える。	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 基礎と応用のバランスを考慮している。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 中途退職者の補充および定員割れ状態の改善	【問題点】 定員に対して、十分な確保ができていない。次年度に採用予定。	【問題点】 教員の資質の向上を図るための方策を組織的に実施する必要がある。	【問題点】 定員に対して、十分な確保ができていなかった。
	【課題】 なし	【課題】 上記の改善が必要	【課題】 なし	【課題】 上記の改善が必要	【課題】 なし
根拠資料名					

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名食香粧化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	②	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	① 教育課程の編成・実施方針に則り、整合性に留意しつつ教育課程を組み立てている。具体的には、基礎的・基盤的知識の修得と食・香り・化粧品に関わる実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の三つの科目区分により授業科目を配当している。 ② 教育課程編成にあたって順次性・体系性について、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの対応図を作成し、配慮に努めている。 ③ 単位認定、シラバス・チェック、欠席者のフォローアップ等については、教員間の情報交換を密に行いつつ、適宜学科会議で議論している。例えば教務課からの伝達事項を回覧し、その場で改めて確認する。あるいは評価に関する意見交換を行うなど、学科としての意思統一を図っている。(学科会議資料、教員ポータル等)。 ④ さらに授業内容については、各授業で到達すべき内容と項目の設定について学科カリキュラム検討委員会で実施し、学科会議を通じて各教員に配信し、これに基づくシラバスを作	1、2年生においては、カリキュラムの他に特別プログラム(学科プロジェクト)を準備し、希望者のみが参加できるようにすることで、学生の主体的な学びを促している。また、そのプログラムからの成果物(例えば学生ビール)を発表することで、学生の学びへのモチベーションを刺激している。また、学科卒業生を含む一線で活躍する社会人を外部講師として活用し、新しいものの見方の教授やホンモノに触れる機会を設定している。学生コスメプロジェクトでは、ハマナス果実の免疫賦活作用を明らかにした大学院生の研究成果を化粧水に活用して商品化した。学生アロマプロジェクトでは、学生の作った香り2点が国立科学博物館のミニ企画展で展示された。 3年生においては、早期の研究室配属活動およびゼミ発表を促すことで、卒業論文に関わる実質的な時間を増やしている。客員教授や民間企業の外部講師による実践的授業を設定し、実学に配慮した講義を行うと共に就職活動への意識付けを行っている。 4年生においては、定期的な中間発表等を通して卒業論文の指導を綿密に行うことで、学生の知的好奇心を刺激	成績評価においては、シラバスおよび初回の授業において、評価基準を明確に提示している。また、試験後に成績相談日を設けることで、学生からの評価に対する質問に対して答えている。 学位授与においては、学科にて卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与している。	日頃の研究室での様々な活動時における学生・教員間による交流および、卒業論文中間発表ならびに卒業論文審査を通して、ディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価している。また、問題があった際には、学科会議を通して学科教員全員に周知することで、情報共有と早めの対処を行っている。	大学指定の授業評価アンケート、卒業時アンケートおよび学科が独自に準備したアンケート(6～7回目の授業で実施)等により、学生からのフィードバックを受け、その結果を学科会議や学科内カリキュラム検討ワーキンググループにおいて議論することで、改善及び向上に向けて取り組んでいる。

	成している。学生の修学・生活状況などについての共通認識を持つべく努力している（教員ポータル等） ⑤ 授業科目の位置づけに関しては、カリキュラム・ポリシーに則り、学科会議で合議により設定してきた。 ⑥ キャリア教育に関しては、特に 1 年次よりビジネスマナー講座を必修で設けると共に、特別講義並びに演習を通じて各界のトップランナーに触れ、一緒にワークを通して学ぶ機会を積極的に取り入れている（<u>演習予定表</u>）。	している。 また、国際的な感覚を学生が養うのをサポートするため、H31 年度は大学のシステムを通じてスペインから一流の研究者を招へいし、2 年生及び 3 年生を中心に講義を行った。			
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 「総合教育科目」、「専門教育科目」のいずれにおいても、自然科学から食香粧の幅広い分野を、基礎から応用に至るまで段階的に着実に学ぶことができる。	【長所】 1 年次から実習科目を多く配当し、座学と実習（体験型）を連動させることで、座学で学んだことをすぐに実習等を通して体験できるようにしている。	【長所】 なし	【長所】 日頃から学生と密に接することで、問題点の早期発見と対処が出来ている。	【長所】 なし
	【特色】 1 年次から実習科目を多く配当している。	【特色】 1、2 年生は特別プログラム（学科プロジェクト）によって、研究室に入る前から様々な研究活動を体験できる。	【特色】 学位授与について、学科教員全員により判定（学科会議）が行われている。	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ポータル確認しない学生が少数であるが存在する。	【問題点】 なし	【問題点】 単位付与に際し科目責任者が独自の判断をするケースがある	【問題点】 なし	【問題点】 業務多忙につきカリキュラム検討等の打ち合わせ時間が確保しにくい問題がある
	【課題】 なし	【課題】 特別プログラムに関わる教員の負担軽減	【課題】 学科 DP に照らし合わせたブレない単位付与を学科が主体となり取り組む仕組みの徹底。	【課題】 なし	【課題】 業務のスリム化 アンケートの継続性
根拠資料名	シラバス 学科会議議事録	大学ニュースリリース 学科 SNS、各プロジェクトの SNS 国立科学博物館ニュースリリース	学科会議議事録	学科会議議事録	カリキュラム検討委員会議事録 学科会議議事録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 （☑を記入）	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	アドミッションポリシーに基づき、生物資源や地域資源を活用する食香粧化学に関心があり、社会貢献に対する強い意欲のもとで、自発的に取り組める学生を求めている。そのため、テストの得点だけで判断する一般入学試験だけでなく、面接を通して人物像を理解できる推薦試験にも力を入れており、現在は生物産業学部全体で一般推薦、指定校推薦の他に、大自然に学ぶ北海道入試、私の夢入試のように多様な推薦試験を行うことで、アドミッションポリシーに合致した多様な学生を受け入れることを試みている。推薦系入試合格者には入学前教育の一環として、全員に香りキットを送付し、学科教育に関わる内容への気づきを促進している。また、学科教員全員で入試判定会議を行うことで、公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	左記のように、幅広い入試制度により多様な学生を選抜していることから、定期的に入試制度毎の学生の GPA 把握と必修科目への出席状況把握を行い、学科会議を通して学科教員に周知を図り、必要に応じ指定校の見直し等を行っている。学生の成績を含む個人データを学科 mydisc に保管し、教員が最新情報にアクセスしアップデートできる環境を整えている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 本学科の特色である香り、化粧に興味がある学生を、多く集めることができている。	【長所】 指定校の定期的な見直しにより、指定校入試で入学した学生の質が向上し、一般入試入学者よりも高い成績の者が増加している。
	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 学内には食品加工に関連する学科が多くあることから、食品加工分野での際立った特色を伝えきれ ていない。 香り、化粧を領域にしていることへの認知度が低い	【問題点】 指定校を一定数に絞ったために、良い学生が他へ流れている可能性がある。
	【課題】 SNS の活用、パンフレットの活用 業界との連携とその発信	【課題】 良い学生を確保できる一般推薦や AO 入試の設定が課題。
根拠資料名	学科会議議事録 入試判定会議資料（入試選考会議資料）	卒業時成績表

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ している ☒ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	「設置の趣旨」に記載されている教育課程の編成の考え方及び特色に基づき、体系的に編成している。	以前は食品科学科であったため、食品を専門にする教員が多く所属していたが、現在は「食香粧化学科」の設置の趣旨に基づき、香りおよび化粧を専門とする教員の採用を積極的に行うことで対応している。 H31 年度の採用活動により若手教員 2 名を採用できたので、教育環境の改善と既存教員の負担減が期待できる。	学科教授会を随時開催し、募集、採用、昇任の方針について議論している。	教学 FD 委員会で話し合った内容を学科教員にフィードバックすることで、改善すべき点について共通理解を図っている。 学科独自の授業アンケートを授業 6 ～ 7 回目で実施し、その結果を速やかに学科会議でフィードバックすることにより、授業評価の透明化と改善スピードの加速化を図っている。 学会研究会等への参加を促し、最新の知識・知見の授業へのフィードバックを奨励している。	学科教授会を随時開催し、現在の組織の妥当性の評価を行うと共に、今後の方針について議論している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】	【問題点】 教員枠数 1 名をまだ充足していない問題がある。	【問題点】 地理上の問題から学科に適した人材の確保ができていない。	【問題点】	【問題点】
	【課題】	【課題】 教員補充の継続	【課題】 恒常的な適正ある人材のスкауティング	【課題】	【課題】
根拠資料名	改組関連書類		教員数	学科会議議事録	学科教授会議事録

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部の共通科目とともに、実学を重視した専門教育科目の体系的なカリキュラム作成を目指している。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、学科会議で報告し、様々な措置を講じている。 各ゼミナール代表による卒業論文のポスター発表会を開催している。	成績評価は、シラバスに評価基準を明示し、定期試験等の適切な方法で習得状況を確認し適切に単位認定している。また、科目ごとに成績相談期間を設け、学生からの成績評価に関する質問に応じている。 学位授与は、学科 DP に則りゼミ及び研究室担任が中心となって適切に行っている。	研究室（ゼミナール）の教員ごと適切に行っている。 3 年～4 年次生に、前年度の卒業論文抄録集を配布し、卒論指導の一環としている。	学科の教学WGが定期的に会議を開催し、その内容を学科会議で報告し、取り組んでいる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 基礎的科目から専門科目まで総合的・体系的な履修ができる。	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 文理融合の教育が実践できる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 週 1 回、各学年で少人数のゼミナールを開講し、細やかに学生教育をしている。	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし
根拠資料名	履修のてびき・講義要項（シラバス）	学科会議資料 卒業論文ポスター	講義要項（シラバス）	卒業論文抄録集	学科会議記録

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特に推薦系の入試に際しては、アドミッション・ポリシーを踏まえた小論文や作文を出題、面接時にも「生物産業の持続的発展や自然環境との共生に関心を持ち、明確な問題意識と強い学修意欲を有している」等、主体的に学修できる人材か確認した。また、評価の基準を示した用紙を担当教員に渡し面接担当によって評価のばらつきがないように取り組んだ。	学科会議において、学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っている。その結果を受け、改善・向上に向けた取り組みを行っている。本学入試センターからの依頼もあり、「入学者としての要件」についてより適切に理解されるように文言を修正した。 令和元（平成 31）年度は、学科 1 年生と 2 年生を対象に、学科の志望動機、学習目標などを把握するためのアンケート調査を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複数の推薦入試において面接を実施することにより、受験者の問題意識や学修意欲、人物等を勘案した入学者選抜ができる。	【長所】 特になし
	【特色】 なし	【特色】 特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 特になし
	【課題】 なし	【課題】 特になし
根拠資料名	評価基準 各入試の募集要項（大学ホームページ）	入学者としての要件 学生へのアンケート調査票

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	分野及び研究室の特色を示し、学科会議等で検討をしている。 教員募集の際には学部・学科の方針を踏まえた内容を提示している。	分野・研究室の特性や教員の年齢構成・専門分野を考慮し教員配置を行っている。	教員採用は一般公募として、大学のホームページ、JREC-IN で募集情報を掲示している。 昇格等は自己申請を基本とするが、大学の定める審査基準により公正かつ厳格に実施している。	学生が回答する授業評価アンケートの結果に基づき、各教員が授業改善に取り組む。	学科の人事委員会で人事計画を立案し、これを学科会議等で確認・共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 なし	【長所】 文理融合型教育の実践	【長所】 なし	【長所】 なし	【長所】 なし
	【特色】 なし	【特色】 2 分野 5 研究室体制により幅広く経営学を学ぶことができる。	【特色】 なし	【特色】 なし	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし	【問題点】 なし
	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 なし	【課題】 アンケート結果の反映は、各教員の裁量に任されている。	【課題】 分野・研究室・学科全体でのチェック体制の構築。
根拠資料名	学部・学科・課程紹介 教員公募案内（ホームページ）	学部・学科・課程紹介	資格審査委員会資料	授業評価アンケート結果	学部・学科・課程紹介

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名北方圏農学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	■学生と教員間の交流事業 平成 29 年度に実施した 1 年次生の研究室訪問の取り組みを基盤とし、学科や研究室、教員の取り組みや研究について学生に理解を深めさせ、学生に学科のイメージの定着を図ると共に、自ら行動し学ぶ姿勢の醸成と学習意欲の向上を目指す。	■新実験・実習カリキュラムの完成年度へ向けた内容の充実 令和元年度からの学部・学科改組に基づく改正カリキュラムの運用へあたり、見直しを行った実験科目および実習科目を中心とした現行のカリキュラムの定着をはかる。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 30 年～令和 3 年）	3 年サイクル（令和元年～3 年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ 研究室訪問の実施方法についての検討（～4 月） 1 年次生への周知と研究室訪問の実施（～7 月） 1 年次生へのアンケート調査および解析（～12 月）	＜令和元年度＞ 新カリキュラム実施へ向けた体制の整備と実施内容の検討（～7 月） シラバスの作成（～12 月） 担当教員の決定（～12 月）
目標達成を測定する指標	＜令和 3 年度＞ 研究室訪問出席者数 1 年次生への研究室訪問に関するアンケートおよび感想	＜令和 3 年度＞ 開講科目表およびシラバスの作成 授業評価アンケートによる検証
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	教員毎に企画した研究室訪問を実施することにより、興味のある研究を体験することができるようにしている。	新カリキュラム開始を行った結果、再履修者の対応についての検討が不十分であった。このため、教員および再履修学生の認識にずれが生じることがあり、対応方法の一元化に向けた協議を続けている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 複数の企画に参加し、学科の内容を周知することができる。	【長所】 3 年次以降の研究室配属や卒論研究生かせる内容を段階的に学べる。
	【特色】 フレセミの一環として、最低 2 回以上の参加を促している。	【特色】 段階的に学びのレベルを高度化できるように 1～2 年次の実習内容が連携した内容となるように見直しを行った
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 教員の負担の増加。	【問題点】 実験実習費の圧縮。
	【課題】 未参加学生に対するフォローアップの時期の設定が難しい。	【課題】 季節性の高い内容や安全確保、担当教員間の認識の統一、人数制限が必要な実習では、新カリと旧カリ学生の実習日等の調整が必要
根拠資料名		

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■連携協定を活用した研究環境整備 連携協定を締結した農協を中心として、人材育成を考慮した試験研究の協力体制を整備する。
実行サイクル	2 年サイクル（令和元年～2 年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ 関係機関との協議（～8 月） 試験研究実施へ向けた具体的なプラン作成（～2 月）
目標達成を測定する指標	＜令和 2 年度＞ 関係機関との連携体制プランの作成
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科内だけでなく、学科間の連携に配慮した研究実績に取り組んでいる。 新たな取り組みとして、エミューを題材とし、国内生産組織や他大学を含めた研究協議会設立へ向けた準備を進めている
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 人的交流により研究の幅を広げることができる。
	【特色】 できるだけ、わかりやすい観点で成果が出せるように努めている
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 協議のための移動や時間の設定
	【課題】 成果を PR する場所の検討が不十分。
根拠資料名	資料 1 エミュー研究協議会次第

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性および H30 学科名称変更と H31 カリキュラム変更を踏まえ、学部の入試活動との連携を図りながら学科の魅力づくりに取り組む。
実行サイクル	4 年サイクル（令和元年～令和 4 年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ 広報体制の構築とオープンキャンパス等の展示内容の検討（～5 月） 研究室や教員の取り組みについての紹介ポスターなどの作成 （～7 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和 4 年度＞ オープンキャンパス参加者数およびイベント参加者へのアンケート 毎年度の入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	できる限り展示内容のテーマを規格化し、オープンキャンパスの参加者の特性に合わせた説明や運営に努めた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 できるだけ長く説明する時間を設けるようにした。
	【特色】 大学案内の研究室関係の写真をアイコン的な題材に統一すると共に、農業をイメージしやすい農業機械の模型を展示するなど、展示構成の検討を行った。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 受験状況との検証が不十分のため、評価が難しい。
	【課題】 受験状況との検証が不十分のため、評価が難しい。
根拠資料名	

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名海洋水産学科

1．教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの深化 今後予定される新たな教育カリキュラムの編成に向けて、特に 1・2 年次にとって魅力のある学科専門分野と学部横断型の学びに重点を置いたカリキュラムを策定する。
実行サイクル	__3__ 年サイクル（平成 31 年～令和 3 年）
実施 スケジュール	<平成 31 年度> 学科内での問題意識の擦り合わせ、具体的方針の策定（～8 月） FD 委員会を中心に学科専門カリキュラムと学科としてあるべき学部横断型のカリキュラム内容の検討（～2 月）
目標達成を測 定する指標	<平成 31 年度> 基礎実験・臨海実習および海洋水産体験実習のメニューの改訂 あるべき学科専門カリキュラムと学部横断型カリキュラムについて問題意識をすりあわせる
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	あるべき実験・実習の策定に向けて、学科で問題意識をすりあわせ、具体的方針を策定中。 あるべき学科専門カリキュラムと学部横断型カリキュラムについて問題意識のすりあわせを実施している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 より良い実験・実習・カリキュラムが可能となる。
	【特色】 あるべき実験・実習・カリキュラムを具現化する。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 完成に至っていない。予算確保及び教員確保の問題
	【課題】 あるべき学科の人事構成の完成を待ち、確立を目指す。また、学部のカリキュラム編成方針の確立が必要。
根拠資料名	今のところなし。

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■地域のニーズに則した研究活動の実施 10 年を経過した海洋水産学科では、学科の専門性を活かし、網走市、オホーツク圏、北海道、さらにつながりを持つ海域・地域におけるニーズに応えるべく、教員・研究室それぞれの研究活動の幅を広げ、内容を深化させる。その研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	__3__ 年サイクル（平成 29 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	＜平成 31 年度＞ 現在までの具体的取組内容の整理、今後の可能性についての検討 （～3 月）
目標達成を測 定する指標	＜平成 31 年度＞ 地域との共同研究の現状把握、課題の抽出 関連した外部資金への応募・獲得状況
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	平成 30 年度に地元の 2 漁協との包括連携協定締結が行われ、今まで以上に地域のニーズの抽出と連携が容易になった。 地域の水産関連機関が一堂に会する網走市水産研究会議の継続的な開催が決まり、目標達成の体制が構築された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 地元密着型の課題の策定が可能となった。
	【特色】 共同研究に向けた、本当に必要な課題の抽出が可能となった。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 新型コロナ対応のため、関連会議が延期となり具体的な課題の選定が行われていない。
	【課題】 担当者間の課題抽出作業の実施。
根拠資料名	包括連携協定書

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び今後予定されるカリキュラム変更を踏まえ、ディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ受験生を確保するため、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、積極的な取り組みを展開する。
実行サイクル	__3__年サイクル（令和元年～令和3年）
実施 スケジュール	＜令和元年度＞ 指定校の検討（～5月） 学科教員の合意による方針の策定（～10月） 機会を捉えた積極的な情報発信（随時）
目標達成を測 定する指標	＜令和元年度＞ 現行実施の広報関係企画の評価作成、課題の抽出 令和元年度入試志願者状況
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	指定校を見直した。平成30年度に高校のランクを上げたが、本年度は昨年度以上の指定校推薦による入学者を確保できた。また、機会を捉えた積極的な高校訪問などにより一般推薦入試やAO入試によっても主に実業系高校のディプロマポリシーに沿った高い目的意識を持つ入学者を確保できた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 適切な指定校の見直しが行えた。 積極的な情報発信が入学者確保に結びついている。
	【特色】 なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 指定校の変更が、入学後の教育にどのように結びつくか？ 大学入試の大きな変革が、次年度以降の入試にどのような影響を及ぼすか不透明
	【課題】 指定校の見直しが、次年度以降の入試結果に結びつくか？
根拠資料名	指定校リスト

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名食香粧化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②
目 標	■教育カリキュラムの改正 平成 31 年度の学部方針に基づく生態系循環エコアグリフードシステムを基軸とした教育カリキュラムへの改正に向けて、学部共通の学科横断的体験型プログラム等を踏まえ、その中で、天然資源および食品や香粧品素材の性質や製造原理など基礎から応用まで総合的な学びに重点を置いた学科の特色・専門性をより活かせる学科専門カリキュラムを策定する。	■学科プロジェクトの推進とヒカル学生の創出 1 年生、2 年生に向けた「食・香・粧」領域を取り扱う学科のプロジェクトを設定し、有志学生を募り、研究活動のフックとなるような気付きを涵養する。モチベーションの高い学生のニーズに応えるプロジェクト設定により、学生のやる気の継続と充実感の向上を図る。キャンパス見学会や収穫祭、SNS 等のチャネルによる成果発表により、学生保護者や受験者にも訴求する好循環を形成する。
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年～平成 30 年）	2 年サイクル（平成 30 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	<平成 31 年度> WG による課題設定、スケジュール等調整（10 月） 学科 WG による H31 年前期科目のシラバス連携調査（11 月） 学科 WG による H31 年後期科目のシラバス連携調査（～11 月） H31 年科目担当者策定（12 月）	<平成 31 年度> 学科会議により学科プロジェクトの設定と募集（4 月） プロジェクトの開始（4 月～随時）
目標達成を測定する指標	<平成 31 年度> シラバス連携状況調査結果 R2 年科目担当者決定	<平成 31 年度> 成果物の公表（キャンパス見学会展示、収穫祭、SNS） 教育懇談会での保護者への意見収集 参加学生のGPS調査
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	R2 科目担当者は決定したがシラバスの構築と科目間連携は今後の課題となっている。	次の 4 つのプロジェクトを設定しそれぞれ希望者（人数）を確定した。「熊谷喜八道場（1 年次 12 名、2 年次 12 名）」「学生ビールプロジェクト（1 年次 16 名）」「学生アロマプロジェクト（1 年次 12 名）」「学生コスメプロジェクト（1 年次 13 名）」。各プロジェクトについてInstagramに専用サイトを学生が作成し、運用を任せている。 学生ビールプロジェクトでは、網走寒冷地農場の協力が得られ、大麦播種、ホップ収穫を学生が体験できた。また、収穫したホップは協力企業にてプロジェクト学生がペレット化し、網走ビールでの学生ビール醸造の原材料を確保した。 学生アロマプロジェクトでは、国立科学博物館のミニ企画展「香りの魅力」に 1 年生チームが作った香料 2 点が展示されることとなった（期間：R2 年 3/17～4/12）。 学生コスメプロジェクトでは、化粧の化学研究室大学院生の学会発表知見「ハマナス果実抽出液は免疫細胞を活性化させる」に基づき、ハマナス果実化粧水（MAW）を商品化。網走市ふるさと納税返礼品に対応できるよう主成分を網走産のもので作成した。 2 年次終了時 GPA は 2.45±0. 41（熊谷喜八道場）であり、学力維持向上が示唆された。GPA 引き続きモニターしていく。
現状説明を 踏まえた	【長所】 日本で唯一の食、香り、化粧を学べるカリキュラム	【長所】 学生コスメおよび学生アロマプロジェクトに関わった学生には、製品化までに製造企業・団体と数回の実習や

長所・特色		講義を重ねたため、製品化のプロセスを学べた。 商品の現物は何よりも説得力があることから広報にも役立つ。
	【特色】 実習科目について、低学年では体験型内容を高学年では原理や操作の習熟を目標としたシラバス構成とし、学びの興味を抱かせ、年次が進むに従い興味の探求を深化させるシラバス構成を目指している。	【特色】 北海道の生物資源や研究成果を活用した「ものづくり」を食・香・粧の各領域でアピールすることが出来る。 学生のモチベーション向上と共に地域の課題解決を図ることができる。 学生の実習に対する意識づけに役立つ。 必修科目を複数落としているとエントリーできないので成績向上が期待できる。 時間割の空白を補完することができる。
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 教職科目 学部共通科目の実施方法	【問題点】 参加学生が必ずしも全員が参加している訳ではない。 担当する教員の負担が非常に大きい。
	【課題】 金曜日を共通科目実施日として設定し実験実習を行った結果、曜日によって 3 限始まりに出来ない 時間割の問題が課題 化粧品、香料の関連科目設定（食品重視からの移行）	【課題】 参加しない学生の篩い分け方法、タイミングを考える。 教員負担軽減の方策 麦やホップ栽培での北方圏農学科、寒冷地農場の協力体制構築
根拠資料名	R2 年学科実験実習スケジュール 学科会議議事録	SNS プレスリリース

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■連携協定や共同研究等を活用した研究プロジェクトの実施 学科の専門性を活かした食品、香料および化粧品をテーマとする連携研究プロジェクトを関連企業あるいは研究機関と企画・実施するとともに、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	<u>3</u> 年サイクル（平成 29 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	<平成 31 年度> 具体的取組内容の検討、参画教員選定（～10 月） 連携先機関への打診（～12 月） 実施に向けた連携先機関とのスケジュール調整（～3 月）
目標達成を測 定する指標	<平成 31 年度> 連携研究プロジェクトの策定 プロジェクト参画教員数 関連した外部資金への応募・獲得状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	以下の産学連携、官学連携のプロジェクトが設定された。 ＊阿見町、地域起こし・特産品の成分分析と用途開発、 山崎 ＊コーケンフード&フレーバー(株)、ホタテ加工副産物の素材化、山崎 ＊サントリーグローバルイノベーションセンター（株）、飲料等の複雑味特性評価方法、分析方法に関する研究、妙田 ＊湧永製薬（株）、にんにく抽出液の香気解析、妙田 ＊東京アライドコーヒーロースターズ（株）、非焙煎コーヒー豆エキスの香気解析、妙田 ＊オホーツク農協連 発酵豆乳素材の開発 遠藤、山崎 ＊物産フードサイエンス オリゴ糖の機能性解析 遠藤 ＊タカナシ乳業 乳酸菌、ビフィズス菌の機能性・ゲノム解析 遠藤 ＊網走市お土産品開発 山崎
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 生物資源を食・香・粧の領域に幅広く展開出来る強みがある
	【特色】 研究室間連携による効率的かつ効果的なアプローチができる
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 実用化研究につなげる成果が無いこと 研究室連携課題が少ない
	【課題】 外部資金等の活用による実用成果の創出 研究室間、学科間連携課題を増やす

根拠資料名	共同研究契約書 委託研究契約書
-------	--------------------

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び H30 学科名称変更・H31 カリキュラム変更を踏まえ、多元的評価による高い志や目的意識を持った受験生を確保するために、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、学科独自の取り組みとして以下の広報・募集活動を実施する。 学科オリジナルのパンフレット作製 SNS を活用した広報活動 積極的な出張講義の実施 各種入試広報に関するイベントへの参加
実行サイクル	<u> 2 </u> 年サイクル（平成 29 年～平成 30 年）
実施 スケジュール	＜平成 31 年度＞ 担任による新入生への入学動機の聞き取りとキャンパス見学会の感想収集（4 月） 入試対策実行委員会を中心とした現状分析（5 月） 活動原案作成→学科内調整→オホーツク入試課と調整（～7 月） 次年度広報・募集活動計画策定、次年度予算申請（12 月）
目標達成を測 定する指標	＜平成 31 年度＞ 現行実施の広報関係企画の評価作成 次年度広報・募集活動計画策定 平成 31 年度入試志願者状況
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	指定校入試では前年比 1.4 倍増の受験者があったが推薦系入試の全体数は前年と違いは無かった。 出張講義先の横須賀学院からサイエンスキャンプの申し出があり、女子中高生 8 名の受入を実施。大豆を使った成分分析、食品製造、乳液製造、香気分析に取り組んだ（12 月）。 学科プロジェクト毎に SNS（インスタグラム）を開設。所属学生が管理を担当。 学科プロジェクトの成果物（学生ビール、学生コスメ）の販売や頒布。熊谷喜八道場のレシピを学科ブログで公開。学生アロマの成果品 2 点を国立科学博物館ミニ企画展「香りの魅力」で展示。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】
	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 世田谷一般推薦入試不合格者や地域後継者入試不合格者を取り組むための、推薦系後期入試「私の夢」入試では期待される人数の受験は無かった。
	【課題】 世田谷不合格者生徒を取り込める入試制度の設定 世田谷・農大ブランドに依存しない受験生確保の方策
根拠資料名	パンフレット現物 出張講義報告 SNS（含高校ホームページ）

学部・研究科名生物産業学部

学部長・研究科委員長名吉田 穂積

学科名・専攻名自然資源経営学科

1．教育に関する総合的事項

	①
目 標	■教育カリキュラムの改正 平成 31 年度の学部方針に基づく生態系循環エコアグリフードシステムを基軸とした教育カリキュラムへの改正に向けて、学部共通の学科横断的体験型プログラム等を踏まえ、①フィールドワークと体験重視のプログラム、②実学を重視した専門教育科目の体系的な履修に重点を置いた学科の特色・専門性をより活かせる学科専門カリキュラムを策定する。
実行サイクル	3 年サイクル（平成 29 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	＜令和元（平成 31）年度＞ 科目担当者の確定（～10 月） シラバスの作成（～12 月） 実施（～12 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和元（平成 31）年度＞ シラバスの作成 学生に配布した当該プログラムの実施要項
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	令和元年（平成 31）年度のカリキュラム変更にともない、自然資源経営学実務演習にて、学科教員の専門領域を活かした地域密着型フィールドワーク・体験重視型プログラムを組み込んだコースを複数用意、学生の学習目標に沿って履修することができるようにした。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 添付資料に示すように、自然環境保全、地域資源活用、地域産業振興に関係する多様なコースを設置した。
	【特色】 いくつかのコースは、コース内容に関係する関係機関、専門家と連携して演習を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 フィールドワークに際して、1）天候不良時の代替日の確保、2）引率教員の確保、3）引率教員の交通費等の諸経費の確保
	【課題】 地域密着型フィールドワーク・体験重視型プログラムのより一層の充実。
根拠資料名	自然資源経営学実務演習の履修の手引き（学生に配布した当該プログラムの実施要項）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	■連携協定を活用した研究プロジェクトの実施 生物産業学部が締結した産官学金労による多様な包括連携協定を利用して、学科の専門性を活かした「起業体験プログラム」等をテーマとする連携研究プロジェクトを企画・実施するとともに、この研究成果を学科の学生教育及び地域・社会等に広く還元する。
実行サイクル	__3__ 年サイクル（平成 29 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	＜令和元（平成 31）年度＞ 具体的取組内容の検討、参画教員選定（～10 月） 連携先機関への打診（～12 月） 実施に向けた連携先機関とのスケジュール調整（～3 月）
目標達成を測 定する指標	＜令和元（平成 31）年度＞ 連携研究プロジェクトの策定 プロジェクト参画教員数
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	起業体験プログラム及び地方創成フォーラムは H29 年度に実施。 H30 年度からは連携協定先との取組みに学生を巻き込む活動を展開している（福島町[北海道]、日本政策金融公庫[北見支店]からの新規就農支援に関する受託研究など）。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 本学科の専門性を活かし地方創生に貢献できる。
	【特色】 学生が参加できるような体制になっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 プロジェクト参画の学生参画について、講義出席との関係でスケジュールの調整が難しい。
	【課題】 多くの学生が関わりを持てるような体制。
根拠資料名	連携研究プロジェクトの実施状況がわかる資料

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	■受験生（学生）確保に向けた取り組み オホーツクキャンパスの地域性及び H30 学科名称変更・H31 カリキュラム変更を踏まえ、多元的評価による高い志や目的意識を持った受験生を確保するために、大学・学部全体による広報・募集活動に加えて、学科独自の取り組みとして高校生への参加を呼びかける、以下の広報・募集活動を実施する。 地方創成フォーラム in 東京農大 農業女子：チャレンジ&応援プロジェクト 起業体験プログラム in オホーツク
実行サイクル	<u> 3 </u> 年サイクル（平成 29 年～平成 31 年）
実施 スケジュール	<令和元（平成 31）年度> 学科長と入試対策実行委員会を中心とした現状分析（～8 月） 学生へのアンケート調査実施（～8 月） 活動原案作成→学科内調整→オホーツク入試課と調整（～11 月） 次年度広報・募集活動計画策定、次年度予算申請（12 月）
目標達成を測 定する指標	<令和元（平成 31）年度> 現行実施の広報関係企画の評価作成 次年度広報・募集活動計画策定 令和 2 年度入試志願者状況
自己評価 （☑を記入）	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	地方創成フォーラム、起業体験プログラム、農業女子プロジェクトを H29 年度に実施。H30 年度からはオール農大で取り組む農業女子プロジェクトに絞って展開した。また H29 年度より学生ブログも週次更新しており、学生目線での情報発信を継続した。また、入学した学生に対して入学の動機、学科 HP の閲覧状況などについてアンケート調査で学科広報の効果について実態を調べた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 学生ブログでは学生目線で学科の魅力を PR している。
	【特色】 農大女子学生と女子高生の交流を図るインターンシップ等
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 特になし。
	【課題】 発信する情報が適切（より魅力ある内容であるか）の検証や検討、また情報発信と入学者の関係性が十分に検証できていない。
根拠資料名	農業女子プロジェクト申請書 学生ブログ（農大ホームページ） 学生へのアンケート調査票